



縄文時代後期（約 4,100 年前～約 3,000 年前）

大集落が分散、縄文文化変容期

気候は寒くなり、海退現象が進む。東日本では大規模集落が分散し、西日本では定住集落の再登場。土器の種類が多様化し、壺・浅鉢・注口土器など繊細な模様となる。北東北では、環状列石や配石遺構、石棺墓や甕棺、漆文化や漁具、祭祀具が発達する。集落や墓のあり方、社会構造や精神文化などに変化を起こした縄文文化の変容期である。

幸畑(1)遺跡 後期前葉（約 4,100 年前～約 3,800 年前） 集落が分散化

出土した土器から後期前葉と考えられる。直径が 3～5m の竪穴住居跡で、楕円形や不整円形である。

- 遺構 ・ 竪穴住居跡 3 軒（石囲炉 2 基、地床炉 1 基）
・ 土坑 5 基（円形）
- 遺物 ・ 十腰内Ⅰ式土器（深鉢、浅鉢、壺など）
・ 鐸型土製品 2 点（第 3 号竪穴住居跡）
・ 石器：石鏃、石槍、石匙、敲磨器



図 I-36 幸畑(1)遺跡の地図

弥栄平(2)遺跡 中期末葉から後期前葉（約 4,200 年前～約 3,800 年前） 弥栄平(2)式を設定

後期初頭の土器編年を埋める弥栄平（2）式が設定され、後期の十腰内Ⅰ式土器の成立を考えるうえで貴重な一括資料である。

- 遺構 ・ 竪穴住居跡 1 軒 ・ 土坑 4 基 ・ 埋設土器 1 基 ・ 集石遺構 1 基
- 遺物 ・ 後期初頭の土器が主体（深鉢、鉢）
・ 中期と後期の石器：石鏃、石匙、スクレイパー、剥片、磨製石斧、敲磨器、石皿
・ 土器片利用円板と岩版 各 1 点



弥栄平式土器

大石平(1)(2)遺跡 中期末葉から後期前葉（約 4,200 年前～約 3,800 年前） 祈りの場か？

湧水地点南側に、中央に配石遺構を有する広場の外側に 12m 幅で、円形にめぐる柱穴やフラスコ状土坑群が十腰内Ⅰ式期に形成されていた。

- 遺構 ・ 竪穴住居跡 49 軒 ・ 土坑 776 基 ・ 配石遺構 18 基 ・ 屋外炉 6 基と多数の柱の穴
- 遺物 ・ 十腰内Ⅰ式土器が主体（深鉢、鉢、台付鉢、壺、皿、切断壺）

- 土製品：土偶、三角形土版、手形足形付土版、耳飾、鐸形土製品、靴形土製品、キノコ形土製品、土冠、土器片利用土製品、円板状土製品、動物形土製品、ミニチュア土器、蓋形土製品、用途不明土製品の 733 点が、南側の湧水地区から出土
- 石器総数 6,500 点：石鏃、石槍、石錘、石匙、石篋、不定形石器、楔形石器、磨製石斧、打製石斧、敲磨器、石皿、台石、砥石など
- 石製品：軽石、滑車形石製品、石冠、円板状石製品、石棒、有孔石製品など 254 点
- 貝殻のブロック（第 16 号土坑の低面から出土：アサリ、イソシジミ、マガキ、オオノガイ）



赤漆彩色切断壺型土器と手形足形付土板

上尾駁(2)遺跡 後期初頭から中葉（約 4,100 年前～約 3,300 年前）大規模集落と 6 つの泉

十腰内Ⅰ式期に集落が大きくなる。南側緩斜面に東西に直線的な集落構造。中央の広場に土坑墓と数十本の柱穴（トーテムポールか？）があり、各家々から鐸形土製品や円板状土製品が出土。現在でも 6 つの泉を確認できる。

- 遺構 ・ 竪穴住居跡 78 軒 ・ 屋外炉 24 基 ・ 土坑 395 基 ・ 配石遺構 54 基
・ 埋設土器 5 基 ・ 焼土遺構 7 基
- 遺物 ・ 土器（十腰内Ⅰ式土器が主体）：深鉢、鉢、台付鉢、壺、切断壺、把手付土器
・ 石器：石鏃、尖頭器、石錘、石匙、石篋、不定形石器、磨製石斧、打製石斧、敲磨器、石皿、台石、砥石、軽石
・ 石製品：石刀、円板状石製品、石冠、ヒスイ製垂飾品、加工痕のある水晶
・ 土製品：足形付土版、土偶、耳飾、鐸形土製品、靴形土製品、キノコ形土製品、土冠、動物形土製品、土器片利用土製品



土 偶



円板状土製品



鐸形土製品



三角形土製品



三角形石製品



把手付土器

南側の傾斜地に弧状に竪穴住居跡、西側に土坑が集中している。磨消縄文を用いた方形文様を主体とした大柄な文様構成の沖附（2）式が設定されている。

1 遺構 ・ 竪穴住居跡 9 軒 ・ 土坑 52 基 ・ 焼土遺構 8 基

・ 配石遺構 1 基 ・ 埋設土器 1 基

2 遺物 ・ 土器（前期と後期で、後期初頭が主体）：深鉢、鉢、壺、

切断壺、狩猟文土器

・ 土製品：土器片利用製品（方形・円形）

・ 石器：石鏃、石錘、石匙、石筥、不定形石器、磨製石斧、打製石斧、敲磨器

・ 石製品：円板状石製品、有孔石製品



図 I-37 沖附(1)遺跡の地図



沖附(2)式土器

壊された土器 7 個体を敷き詰めた土坑や 3 基の円形土坑の中央土坑から 3 個の完形壺が出土し、内部に骨片が入っていた改葬用土器棺が見つかる。後期葬制を知るうえで貴重な遺構である。

1 遺構 ・ 土坑 4 基（フラスコ状土坑 1 基、

円形土坑 3 基）

2 遺物 ・ 土器：深鉢、鉢、壺、台付鉢



図 I-38 鷹架遺跡の地図



改葬用の土器棺

直径 3～4m 前後の円形または楕円形の後期初頭の基本的な竪穴住居跡が出土。竪穴住居跡内から切断壺や埋葬用壺が出土。石囲炉の炉石では、方形が古く、円形もしくは U 字形が新しいようである。

1 遺構 ・ 竪穴住居跡 17 軒

・ 土坑 14 基（貯蔵穴のフラスコ状土坑は 8 基） ・ 溝 5 本（時期不明）

2 遺物 ・ 土器：蛸沢第 1～3 群の深鉢が主体で、十腰内Ⅰ式も出土

・ 土製品：キノコ形土製品

・ 石器：石錘、石匙、石筥、磨製石斧、打製石斧、磨石、凹石、叩石、石皿

巨大木柱群と配石遺構のムラ

1 祈りの場を伴ったムラ 大石平（1）遺跡



大石平遺跡全景



図 II-8 配石遺構の写真

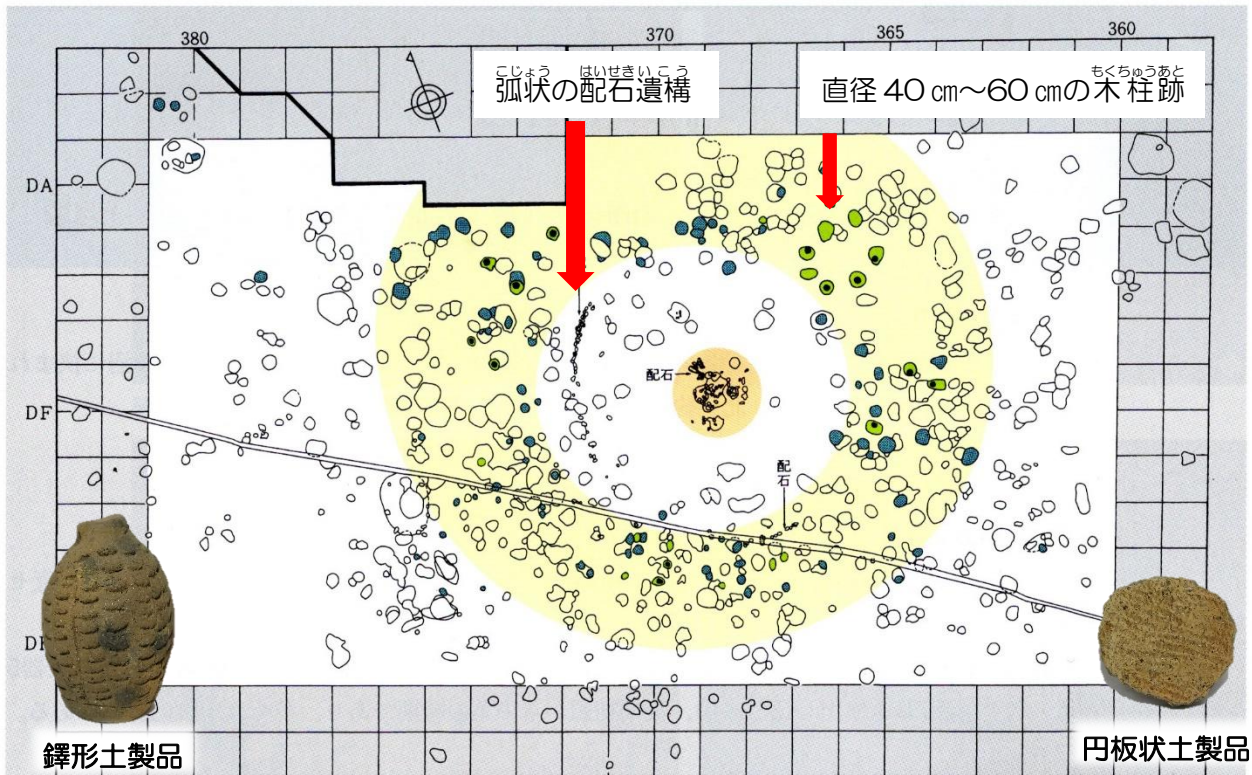


図 II-9 遺構配置図

大石平（1）遺跡のムラの中央部は、直径約 24m の円形で直径 20～40 cm ほどの礫（石）を環状にめぐらせた配石遺構（縄文広場）となっていて、中心部の配石遺構からは、ピット（穴）が発見されている例もある。環状配石の外側には、北陸地方と共通するような円形に並ぶ木柱（直径約 40 cm）の巨大木柱群（モニュメント）と墓壇の可能性が高い約 500 基の土坑群が、幅約 12m で配置されている。鐸形土製品や円板状土製品、手形足形土製品が、縄文広場からはほとんど出土せず、広場の周囲から発掘されている。このことから縄文広場の周囲は、日常的な空間ではなく神聖な「特殊な場」（祭祀や葬儀などの場と墓域）を示していると考えられる。「霊魂の宿るもの」を入れたと考えられている赤彩切断蓋付土器 10 個体も出土。この遺跡は、中期末葉から後期にかけて約 500 年続いた集落跡で、後期の十腰内 I 式期には 7 軒から 28 軒に増加している。

2 集落の移り変わりと墓域を持ったムラ 上尾駁（2）遺跡

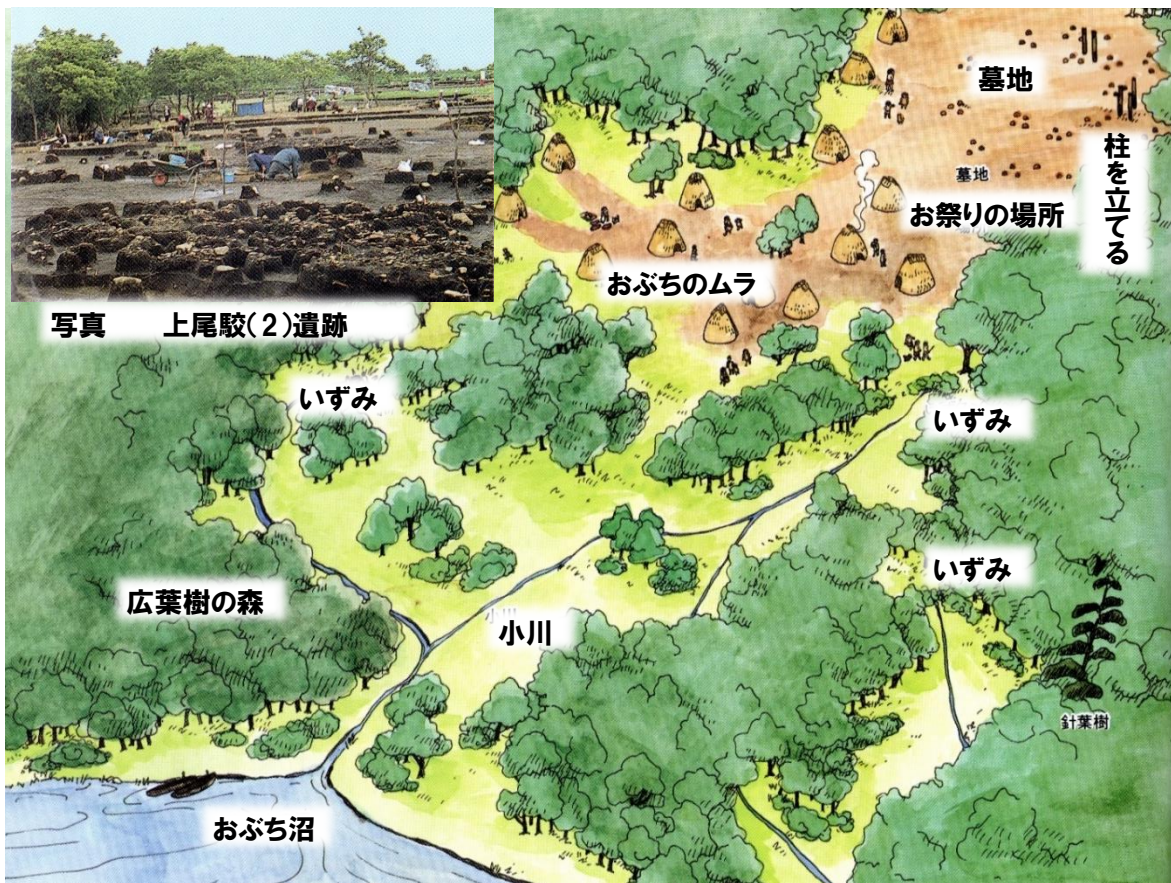


図 II-10 上尾駁遺跡の集落想像図

このムラは、はじめは 6 軒、その後 9 軒、多い時で 27 軒、最後は 4 軒の 4 期が明らかになった。急激に増えた原因は、自然増（分家）なのか、社会増（移住者）なのかわからないが、大石平遺跡でも同じような増加がみられることから、注目すべき社会現象である。

墓地の広場には、数十本の木柱（トーテムポール）が立ち、南西側には竪穴住居跡が広がり、集落を形成している。鐸型土製品と円板状土製品が、土壇や各家々から一個ずつ出土している。6 つの泉が、現在でも確認できる。

後期に集落が拡大し、祈りの場で祭祀がとり行われていた



縄文時代晩期（約 3,000 年前～約 2,200 年前）

共同墓地に葬られた人たち

河川の流域に大きな集落がみられるようになる。サケやマスが主要な食料ではないかと考えられる。大きな村と小さな村で晩期の社会が形成される。

東北を中心に多彩な漆製品や土器、遮光器土偶で有名な亀ヶ岡文化が栄える。土器の形は、深鉢・鉢・浅鉢・皿・壺・注口土器・香炉形土器などいろいろである。三叉文・羊歯状文・雲形文・工字文などの文様を持ち、漆を塗ったものや研磨された美しい土器が多いのが特徴である。篋状木製品や土笛、土面などもみられ、呪術や祭りが行われたと考えられる。

上尾駁(1)遺跡 C 地区 晩期中葉（約 2,900 年前～約 2,600 年前）

3つの共同墓地で、当時の祭祀の様子がうかがえる遺跡

上尾駁（1）C 地区は、晩期の大洞C 1～C 2 式期の土坑墓が 21 基発掘され、そのうち 13 基から多量の玉類766 点（内ヒスイ製 93 点）、赤漆塗り櫛2 点、副葬土器等が出土。「鼻曲がり土面」も発見されている。しかし、居住集落は未発見となっている。

1 遺構 ・ 土坑墓 21 基 ・ 埋設土器 1 基

(1) 土坑 A 群 3 基：ベンガラあり。推定頭位が南東で長楕円の第 35 号土坑からヒスイ製玉 50 点と緑色凝灰岩の玉が出土。



図 I-39 地図：上尾駁(1)遺跡



鼻曲がり土面

(2) 土坑 B 群 4 基：ベンガラなし。推定頭位が南で、幅広の楕円形。带状赤色装身具などの装身具の多くは南側に置かれる。玉類は第 73, 86 号土坑から少量出土。

(3) 土坑 C 群 14 基：すべてベンガラあり。推定頭位は北か北東で、長楕円形である。玉が 9 基から出土し、玉がないものが 5 基。第 25 号土坑からは、赤漆塗り櫛や赤彩台付浅鉢が出土している。

2 遺物 ・ 土器（晩期初頭から後葉まで）：壺、鉢、浅鉢、赤彩台付浅鉢、台付鉢、赤彩土器
・ 石器：石鏃、石槍、石錘、石匙、石篋、異形石器、磨製石斧、石皿、磨石、凹石

- ・石製品：石棒・石刀類などの祭祀関連遺物、ヒスイ 93 点と緑色凝灰岩の玉類あわせて 766 点以上出土
- ・土製品：土偶 3 点、鼻曲がり土面 1 点、土器片利用円板、耳飾り、用途不明土製品、ミニチュア土器
- ・装身具：带状赤色装身具7 点（第 73 号土坑・第 84 号土坑・第 2 号竪穴住居跡各 1 点、遺構外 4 点）、赤漆塗り櫛（第 25 号土坑、第 89 号土坑より出土）

3 3 群に分けられる共同墓地

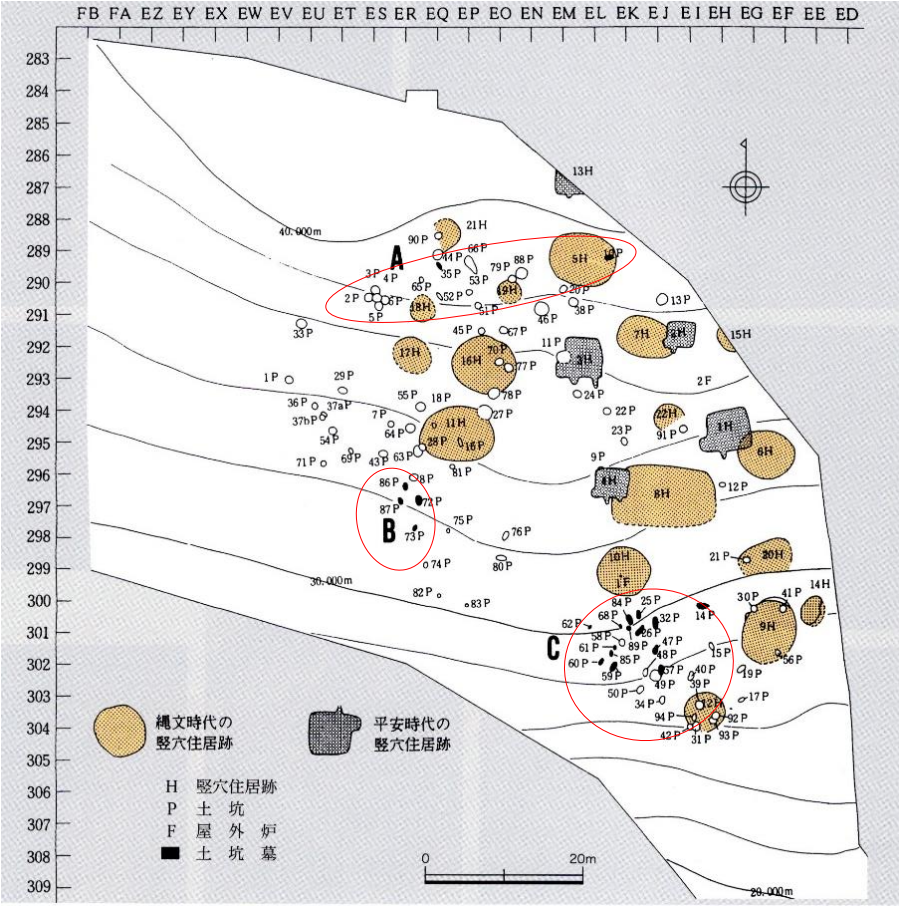


図 I-40 上尾駁(1)遺跡の遺構配置図

3 つのグループは同じ時期の墓と考えられている。

A 群の 2 基の土坑墓 10 号と 35 号は、別のグループと考えられている。

B 群4 基からは、魔よけと考えられている「赤色顔料」は確認されていないが、「带状赤色装身具」が墓の中の頭部があった南側から出土していることから、A や C 群と違う集団と考えられる。「带状赤色装身具」は、それ自体が魔よけだったのかもかもしれない。

C 群の玉の出ていない 5 基（26 号・47 号・57 号・59 号・61 号）は、円形をなすように配置されえている。玉は女性の副葬品と考えられることから、男性の墓とも考えられる。玉の数は、1, 2 個から 50 個以上も出土している墓があり、個人差が大きい。

4 土坑墓とその出土品一覧表

番号	群	土坑番号	長さ×幅×深さ (cm)	長軸方位	玉	破片数	赤色顔料	櫛	带状赤色顔料
1	A	4	136×130×57				△		
2		10	(35) ×64× 8	東一西？	1		○		
3		35	160×85×28	北西一南東	51	7	○		
4	B	72	135×87×16	北一南					○
5		73	98×46×12	北北東一南南西	6				○
6		86	110×90×13	北北西一南南東	8				○
7		87	145×118×21	北西一南東					○
8	C	14	不明	不明	98	4	○		
9		25	(115) ×63×10	北一南	168	68	○	櫛 1	
10		26	163×47×22	北東一南西			○		
11		32	151×75×27	北一南	100	18	○		
12		47	130×67× 1 7	北一南			○		
13		57	155×75×35	北一南			○		
14		59	118×54×36	北東一南西			○		
15		60	100×57×25	北東一南西	1		○		
16		61	(68) ×47×23	北一南			○		
17		62	(85) ×52×5	北東一南西	2		○		
18		68	(55) × (37) ×4	北一南	61	8	○		
19		84	136×72×58	北北西一南南東	56	17	○		
20		85	(93) ×46×11	北一南	165	70	○		
21		89	(55) ×52×11	北一南	42		○	櫛 1	

玉類が多くてもヒスイ製が皆無の墓や 1, 2 個でもヒスイ製だったり、50 個もヒスイ製が入っていたり (35 号) と、副葬品に個人差が見られる。

玉類、櫛、带状製品等は、副葬品より埋葬された人が生前身に着けていたものと考えられ、地位・身分・男女などの差が反映していると考えられる。



図 I-41 ヒスイと玉の首飾り

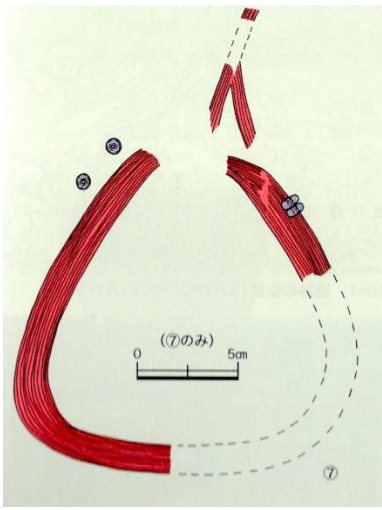


図 I-42 带状赤色装身具

共同墓地に葬られた人たち

かみおぶち 上尾駁 (1) 遺跡 C 地区

1 他に類を見ない玉類の出土率の多さ



図II-11 大石平遺跡全景



図II-12 玉の出土状況 (84号土坑)

玉類は、当時の宝石ともいえる貴重なものでした。出土したヒスイ製のものは新潟県糸魚川産と推定されている。玉は、958 個中 92 個がヒスイ製 (9.6%) で、残りは緑色凝灰岩 (津軽方面で産出) で作られている。

☆青森市朝日山遺跡 (土坑墓 440 基)

- ・赤色顔料を伴う墓 = 87 基 (19.7%)
- ・玉類出土の墓数 = 14 基 (16%)
- ・玉類出土数 = 29 個

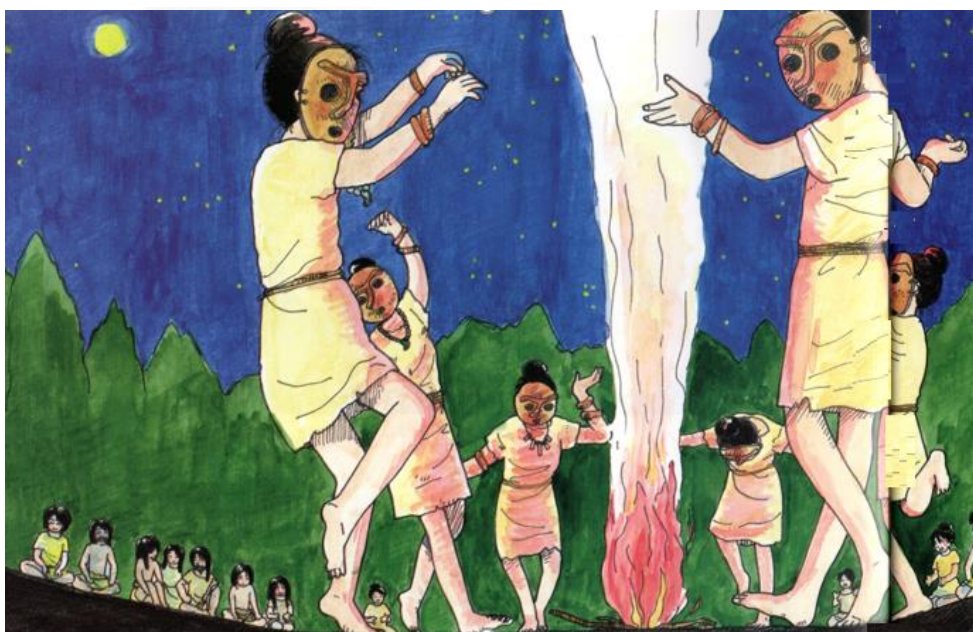


★上尾駁 (1) 遺跡 C 地区 (土坑墓 21 基)

- ・赤色顔料 = 17 基 (81%)
- ・玉類出土の墓数 = 13 基 (62%)
- ・玉類出土数 = 958 個

上記のように、いかにこの遺跡の人たちは、高価な玉類を豊富に持っていたこと、手厚く儀式を行う風習があったことがわかる。

赤色顔料の「赤」は、血や生命を表し、死者の再生を祈禱する儀式に用いられ、玉類は、悪霊を払い、身体・生命・魂を守るためのものではないかと考えられている。



図II-13 上尾駁(1)遺跡の祭りの儀式の想像図

2 鼻曲がりの「お面」を付けた祈禱師がいた！？

土坑墓の約 5, 6 m 離れたところから「鼻曲がり土面」が出土。木柱に結び付けられていたのではないかと考えられている。その他、遮光器土偶や石刀、円板状土製品が出土したことから、お面を付けた祈禱師・呪い師がいて、「カミ様」の仲介者となり、豊かな実りを祈り、人々の病気やけがが早く治るようななどの儀式や祭りを行っていたと考えられる。

土面は全国 147 個出土していて、鼻の曲がっているのは 5 点。左に鼻が曲がっているものは 4 点で、この遺跡から出土した土面だけが、なぜか右に鼻が曲がっている。

𐄌のような鼻は、神の象徴として表現されているのかもしれない。𐄌は、ヒンズー教や仏教、アメリカ州の先住民民族や西洋など世界の多くの宗教で、太陽十字を表している。左万字が太陽神なら右万字は月を神として崇めていたかもしれない。近くに集落がなく、共同墓地だけの遺跡。とても大切な「場所」だったのかもしれない。



鼻曲がり土面



首飾りをした土偶



石刀の柄にも𐄌が二つ



遮光器土偶の左足 2 点が出土



お面を付けた祈禱師が、特別な儀式を行った共同墓地か？